

1. 全国附属幼稚園研究大会提案報告

(1) 提案資料

外部評価の方法と活用について

金沢大学教育学部附属幼稚園
教諭 高本 洋

1. はじめに

本園では、平成14年度まで、行事等の後に保護者向けにアンケートをとり、その結果を集約してきた。それらの意見は保護者から幼稚園への一方的なものに終始しがちで、保護者同士の考えを広めたり、たくさんの考えを保護者へ還元したりするには至っていなかった。

そこで、平成15年度末に保護者を対象に学校評価アンケートを実施し、その結果を保護者に返した。全員の保護者のアンケートの結果をそのまま記載し配布した。それを読んだ保護者の中には、保護者間の意識のずれを感じたり、愚痴っぽい内容にがっかりしたり、という声もあった。それは、無記名だったために、それぞれが好き勝手に書きすぎた部分もあるように思われた。そこで、15年度の反省を活かして、16年度の取り組みを以下のように実施した。

2. 外部評価の方法と活用

方法	活用	成果
保護者アンケート	○平成16年度に記名アンケートを実施 ○食育の取り組みに力点を置く ・弁当の中身は主菜と副菜、フルーツ禁止 ・全部食べきることを指導 ・箸を使うこと、弁当を包むことを年長になるまでの目標にする ・保護者向けに、食育フォーラムを開催 ・アンケートに食育指導の自由記述欄を新設	○記名であっても率直な意見が多かった ○弁当に対する意識が高まった ○残さず食べるようになった ○保護者の食育への関心が高まった
評議員制度	○平成16年11月 日曜参観日 ・保育参観 ・保護者対象のシンポジウムを開催 ○平成17年1月 18:00～20:00 ・子育てトークを開催	○評議員の考えを保護者に還元できた ○身近な親育ちのモデリングとなった ○父親や夫婦での参加があった ○それぞれの子育て観をお互いに聞くことができた
園医の定期来園	○毎週火曜の13:00～14:00に来園 ・子ども達の健康、行動観察 ・保護者の悩み相談 ・養護教諭の相談 ・配慮を要する幼児についての相談	○子どもも保護者も安心感をもてる ○適切な助言をしてもらう ○専門的なアドバイスを受ける 発達障害等の専門家との連携にもつながっている

3. 今後に向けて

様々な立場の人たちによる評価は、自分たちの教育実践を振り返る大切な一つの視点になっている。時には厳しい評価を受けることもあるが、それを真摯に受けとめ、よりよい方向に改善できるよう努力していきたい。なお、評価は、する側と受ける側の両者にとって効果があって初めて評価が活かしているのではないかと考えているので、これからも受けた評価を発信していきたい。さらに、外部評価の方法に関しては、検討の余地があると考えている。

(2) 発表原稿

「外部評価の方法と活用について」

本園では、平成14年度まで、行事等の後に保護者向けにアンケートをとり、その結果を集約してきました。しかし、それらの意見は保護者から幼稚園への一方的なものに終始しがちで、保護者同士の考えを広めたり、たくさんの考えを保護者に還元したりするには至っていませんでした。

そこで、平成15年度末に保護者を対象に学校評価アンケートを実施した時には、その結果を保護者に返しました。それ以降も、受けた評価を保護者に返してはきましたが、活用されているとは言えませんでした。アンケートをはじめ、外部評価をどう活用していけばいいのか取り組むことにしました。今回、その取り組みの中で、「保護者アンケートとその活用」「評議員制度とその活用」「園医の定期来園とその活用」の3つについてお話したいと思います。

まずは、「保護者アンケートとその活用」についてお話します。資料1にもありますが、本園では、学期末の外部評価アンケートで、「1、子ども同士のかかわりに関して」「2、保護者と教師のかかわりに関して」「3、幼稚園からの連絡に関して」「4、幼稚園の行事に関して」「5、食育指導に関して」「6、園舎内外の環境に関して」「7、育友会やサークル活動に関して」の7つの項目について、保護者に自由に記述してもらっています。その中で、平成16年度は「5、食育指導に関して」の項目に感想や意見がたくさん書かれていました。資料2に「食育指導に関して」の意見を抜粋して記載してあります。いくつか紹介しますと、「とても参考になるお話を聞かせて頂いています。子どもの好き嫌いが・・・というより親の好き嫌いや料理の苦手感から、少し気が重くなるテーマでもあります」「具体的にいろんな献立を教えて頂けると助かります」といった率直な意見が書かれていました。平成16年度のアンケートでは、記名をしてもらっていたのですが、しっかりと厳しい意見も書かれており、全体的に見ても、保護者の思いが素直に書かれていたように思います。それは、これまでの保護者とのかかわりを通して、保護者が幼稚園のことを理解してくれている、信頼してくれているからこそだと、私達は判断しています。先ほども触れましたが、7つの項目の中でも、特に、「食育指導に関して」の項目においては、反対意見や要望がたくさんあり、保護者の関心の高さが伺えました。なぜそれほど関心をもってもらったのか、これから、その食育について外部評価をもらうに至った経緯やその活用についてお話したいと思います。

本園では、平成12年度より、これまで週2回弁当だったのが、5歳児で週3回弁当を実施するようになりました。翌年13年度から4歳児も3回になり、これまで以上に保護者の弁当に対する関心が高まってきていました。また、教師の迷いとして、中身がフルーツばかりだったり、ゼリーをうれしそうにもって自慢していたり、ゼリーの交換や取り合いがあったりと、「これでいいのだろうか？」と考えさせられる場面が度々ありました。体づくりにしては、ここ数年間、裸足を推進し、体いっぱいを使って遊ぶことに取り組んできていたので、合わせて“食”について考え直すことにし、平成16年度は、食育の取り組みに力点を置きました。平成15年度に、職員が出張で伺った岡山大大学の弁当の取り組みも参考にさせて頂き、弁当の中身は、主食、副食のシンプルなものにし、フルーツなし、といった強い方針を園として出し、それを残さず食べることを指導しました。技術的な面では、年長児までに、箸を使えるようにな

ること、弁当をつつめるようになることを目標にしました。最初は保護者からも「どうしてフルーツダメなの？」といった声が聞かれましたが、懇談会を通じて園の方針を話したり、徐々にフルーツにこだわらなくなってきた子どもたちの様子を見たりすることで、直接そのような声を聞くことはなくなってきました。子どもたちにも、しっかりと残さず食べることが習慣化してきたように思います。また、はしに関しても、15年度には年長児でもフォークを使って食べていた子が何人かいたのが、今年度は年長、年中全員がはしを使っています。特に年長児は、箸の正しく持とうとする意識が高いです。弁当つつみに関しても同様のことが言えます。親の意識もずいぶん変わったように思います。親にも食育に関心をもってもらおうと、いろいろな取り組みをしてきました。

その取り組みの一つが「食育講演会」です。16年度の1月に、食育の専門家の先生を講師に招き、「幼児期の食育について」というテーマで保護者を対象に講演を頂きました。園として力を入れていたこともあり、保護者の関心も高かったように思います。資料3に講演会を終えての感想をいくつか載せてありますが、3つ目の「これからも楽しい食事を、そして金沢の味をたくさん感じてほしいと思います」といった感想からも、食に対する意識が高まったように思います。また、「食だけにこだわらず、子育て全般に対するお話を伺うことができ、とても良かったと思います」という感想もありました。この講演会の反響が大きかったこともあり、今年度も1月に、「お弁当づくりを楽しもう」というテーマで食育フォーラムを計画しています。

以上のように食育に力点を置き、いろいろな取り組みをしてきましたので、平成16年度の学校評価アンケートには、「食育指導に関して」という項目を記述アンケートに新設しました。資料2の意見をまた紹介したいと思います。「フルーツなしは子どもにとってつまらないのかなあと感じていました。しかし、1年かけてほげんだよりを拝読していくうちに、今だけの幼少期の食生活の大切さが少しずつわかってきました」といった好意的な意見がある一方で、「食事の最後に一粒のいちごを食べる楽しみをお弁当に入れてあげたいとも思います」「果物も大切な栄養素の一つではないでしょうか。常識的な量であれば、お弁当の楽しみとして持たせてやりたいのですが」といった意見もありました。フルーツ一つを取り上げても多様な意見があり、「フルーツなし」に関しては、賛成と反対の意見も半々でした。アンケートを書いてもらうことで、保護者の考えを引き出すことができたかと捉えています。その結果を受けて、職員間でもフルーツをどうするか検討しました。反対もあるけれど賛成も多いという外部評価に基づき、これだけ多様な意見があるということは、もっと深く考えていく必要があると捉え、今年度も食育に力を入れていくことにしました。また栄養的にはカバーできていると判断しましたので、今年度も“弁当の中身は主食と副食、フルーツなし”の方針を継続中です。加えて今年度は、年長児で、野菜を“育てる”“調理する”“一緒に食べる”といった活動を進めています。後ほどお話しする予定の「評議員制度とその活用」と重複するところもありますが、食育に関しては、評議員の方からも「自分たちでつくったものをみんなで食べることができることはいいですね。子どもの意識が変わってきます。」「子どもたちの経験がなくなっているのです。ぜひ育てるところから取り組んで下さい」といった評価をもらっていました。昨年度までも保護者の力を借りて、育てたり、食べたりしてきましたが、今年度は、自分たちで野菜を“育てる”“調理する”“一緒に食べる”ということ意識して取り組んでいます。つい先日、7月上旬のことでしたが、年長児が自分達でつくったきゅうりを取獲したあとすぐに包丁で切り、塩もみしたも

のをうれしそうに他の学年に配っていました。また、みんなで同じものを食べたことで、初めて食べることができた子もいました。そのような活動を通して、食べ物に対する愛情や、食に対する関心を育てていきたいと思っています。そして今年度のこの取り組みが、子ども達にとってどうだったか、また保護者がどう感じたか評価をもらい、次へと活かして行きたいと思っています。

次に、2点目の、「評議員制度とその活用」について、お話させていただきます。本園では、現在、4人の学校評議員を置いています。地域の土地区画整理組合理事長、地域の児童館館長、元本園後援会会長、弁護士の4人の方々です。平成14年度までの学校評議員会は、管理職と評議員との意見交換の会が中心でした。その会でいろいろな意見が出ていたので、ぜひ幼稚園の中で活用していきたいと考えていました。もっと評議員の考えを広めていきたい、応答関係のある活用をめざしたいと考え、15年度は、保育を参観してもらったり、研究内容について職員がレクチャーしたりして、もらうだけではなく、こちらからも発信し、園のことをより理解してもらおうとしてきました。評議員のみなさんからは、「はだしはいいですね」「どんどん外で遊ばせてください」「いい表情で遊んでいますね」と、のびやかに外で遊んでいる子ども達の姿や日常取り組んでいる裸足教育に対して、一定の評価をもらいました。しかし、地域との連携においては、ほとんど取り組みができていない現状に対して厳しい評価をもらいました。その後、評議員の力を借りて、イチゴとりに出かけたこともありましたが、まだまだ足りない部分なので、今後前向きに取り組んでいきたいと思っています。その後、15年度の2月には「のびのび表現会」を参観してもらった後、全職員と評議員とで、子どもたちの様子について語り合う場を設けました。それぞれの立場から見た園のこと、子ども達のことの話を伺い、意義のある時間となりました。そこで、せっかくの評議員の方々の考えを、保護者にも還元していただくのはどうか、保護者も教師とは違う人の話を聞くことで視野が広がるのでは、という思いが出てきました。また、保護者の方からも、評議員の方々の話を伺いたい、という声が上がりました。実は、平成12年度と13年度に、保護者が評議員の一人、元後援会会長のC氏を囲んでのフリートークを開催したことがありました。「さすが3人の子育てをしている方ね。元気をもらったわ」「一人の女性として子育てしながら、自分の生き方をしっかり持っているなんて素敵ね」という感想が聞かれていました。その後14年、15年と2年間、保護者参加型の学校評議員会を開催していなかったため、なおさら、「評議員の先生と話がしたい」という声が上がってきたのでしょう。そこで、平成16年11月の日曜参観日に、学校評議員のメンバー4人全員によるシンポジウムを開催しました。保護者にとって評議員の方々は、子育てにおいても社会で働く者としてもモデル的な存在です。例えば元後援会会長のC氏は、母親の未来像としてのモデルですし、弁護士のD氏は、父親にとって、自分の親よりもちょっと若い世代の人間としてのモデルです。そういった人たちの姿、生き様を保護者が目の当たりにすることで、自分たちも頼れる存在であると感じてもらえたのではないかと考えています。「父親のモデルを見せてもらって元気が出た」という参加者の感想を聞き、評議員制度が十分活用できたと捉えています。資料4にそのときの感想を載せてあります。Aさんの感想の2行目から3行目にかけて「幼児化というのは私たちに当てはまるのかもしれませんが」と書かれていますが、シンポジウムでも「親の幼児化」が課題として挙げられていました。そして「親の幼児化については、ぜひ幼稚園で取り組むべきだ」「お父さんを育てることも幼稚園の大切な役割」という意

見を評議員から頂いたので、平成17年1月に、保護者と教職員が評議員を囲んでの子育てトークを開催しました。評議員からの提案で、父親が参加しやすいように、時間帯を18:00～20:00にしたところ、関心のある何人かの父親が参加でき、夫婦での参加もありました。「父親が子どもと一緒に遊んでほしい」「父親は大きな視点でものを見ることの大切さを教えてほしい」といった意見が評議員から出され、それに対して参加者の父親からは「父がパソコンのスイッチを入れなければ変わるかもしれない」「親のほうに努めて外に出るようにしないといけませんね」といった感想が聞かれました。

このように、評議員制度の活用の成果として、「教育活動の改善」「保護者への還元」が挙げられます。とりわけ保護者への還元に関しては、評議員が「人生のモデル」「子育ての応援者」としての存在になっています。今年度もまた、保護者参加型の学校評議員会を開催したいと思っています。

最後に、「園医の定期来園とその活用」についてお話させていただきます。

本園では園医の先生が毎週火曜日の1:00～2:00に、定期的に来園しています。我々教師は集団の中で配慮を要する幼児について、集団の中で何とか育てていくのではないかと、幼児自身の育ちの問題なのではないかといった見取りに基づき援助をしています。一方、園医の先生は、個々の子どもたちを継続的に観察し、専門的な医学的な見方でアドバイスをし、我々教師にゆさぶりをかけてくれています。そういったことが教育効果を上げています。

例えば、今はもう3年生になった子の例になりますが、園医の先生が定期的に来園するようになった5年前の話を紹介したいと思います。当時3歳児だったA児は、幼稚園にいる時間のほとんどを教官室で過ごし、保育室に戻ることが出来ませんでした。我々教師は育ちの問題ではないかと捉え、そのうち戻れるようになるだろうという思いをもちながら、個別に関わっていました。そんな姿が園医の先生の目に留まり、来園の度に観察するようになりました。約一年の継続観察の結果、私たちも気になっていた言語的な部分に関して医学的見知から意見をいただき、専門機関での受診を進められました。保護者に伝えるときも、園医の先生に間にあってもらったおかげで、保護者もそれほど抵抗なく受け入れることが出来たようでした。早期に受診することが出来たおかげで、その子に対する適切な援助や訓練を施すことができ、その子自身が変わってきました。数週間後に園医の先生から、「A児くん、落ち着いてきましたね」と子どもの姿の評価を受け、教師に対しては「今のかかわり方がいいようですね。このまま続けていきましょう」と教師のかかわり方の評価を受けました。

そのような園医の先生による評価を、制度化しているわけではないのですが、我々はそれ自体が大事な外部評価であると捉えています。

以上の3つの方法を、外部評価を活用する取り組みとして実施しています。それぞれの方法で活用することができ、一定の成果があったと捉えています。外部評価のおかげで、私たち教師は、自信をもって教育活動を展開することが出来ていますし、よりよい方向に改善することができています。さらに、今後、より広めたり、深めたりできるよう、活かし方を探していきたいと考えています。

なお、「アンケートの方法」「よりよい食育のあり方」「地域との連携」に関しましては、まだ課題が残っていますので、今後の取り組みを考えていきたいと思っています。

資料－1

○平成16年度外部評価アンケートの項目（記述式部分の項目）

1. 子ども同士のかかわりに関して
2. 保護者と教師のかかわりに関して
3. 幼稚園からの連絡（園だより、学年だより、ホワイトボード、連絡帳等）に関して
4. 幼稚園の行事に関して
5. 食育指導に関して
6. 園舎内外の環境に関して
7. 育友会やサークル活動に関して

資料－2

○実際の内容

資料－1の「5. 食育指導に関して」についての意見（一部 抜粋）

<とても良かった>

- ・とても勉強になり、食の大切さを改めてかみしめています。毎日毎度の食は生きる源、一度一度をなおざりにせず、大事にし、子ども達と楽しい食卓をと心がけています。
- ・先日の講演会はとても楽しく、また気づかせていただくこともたくさんありました。
- ・戸惑うこともありましたが、いろいろ具体的にご指導頂けるので自分のできる範囲で実践しています。
- ・講演会では非常に興味深いお話が聞け、よかったです。また、日頃から先生方からアドバイスをいただいているので、為になっています。
- ・毎回学年懇談の時に具体例を挙げて指導して頂いたり、保健便りで絵なども盛り込んで分かりやすく指導していただけた事がよかったです。
- ・先生方がいろいろ検討されて指導して下さるので、つい手を抜きがちになるお弁当作りの参考になっています。先日の講演もとてもよかったです。
- ・食育講演会をはじめ、ご紹介していただいたレシピ、本、とても勉強になりました。これからも定期的にお願ひしたいと思っています。
- ・良いと思う。家でもすすんで嫌いなもの（野菜など）を食べるようになった。

- ・お弁当のフルーツ禁止とお箸使用が決められているのが、とても良いと思います。
- ・お弁当指導を通してそれ以外の食事にも通じることが多く、親子共々食べる事、いろいろなものをバランスよく食べることをこれまで以上に強く意識するようになり、よかったです。

○フルーツなし最初は子どもにとってつまらないかなあと感じていました。しかし、1年をかけて「ほけんだより」を拝読していくうちに“今だけの”幼少期の食生活の大切さが少しずつですがわかってきました。

- ・決まりなど統一して頂き、お弁当が作りやすくなった。

<よいと思うが・・・>

- ・とても大切な事ですが、なかなか実践は難しいです。

☆とても参考になるお話を聞かせて頂いています。子どもの好き嫌いが・・・と言うより親の好き嫌いや料理の苦手感から、少し気が重くなるテーマでもあります。

<検討してほしい>

☆初めてのお弁当作りに四苦八苦しています。手探りの中、お弁当をつくっているものにとって食育指導をして頂くことは、とても嬉しいことです。具体的にいろいろな献立を教えて頂けると助かります。

- ・お弁当の件ですが、たまにはサンドイッチを持たせたいとも思うので、そこまでこだわらなくても・・・と正直少し思います。フルーツも小さいの1個ぐらいなら・・・と思う時があります。おっしゃっていることは大変よく分かるつもりですが。

- ・食べ物を大切に、何でも食べて健康な体をつくる、食事のマナーを知る、これらを十分配慮された指導を行って頂いていると思います。これらの向上の為にも是非小学校での給食導入を熱望します。

- ・食育に関しては、本来家庭で担うことなので、園に対して何かを期待しているわけではないが、例えば箸の使い方などについて、もっと年間を通して多数に目をかけてほしい。

- ・年長組がしていた畑のお世話を代理で年中組が行った頃、野菜に関心を持つようになりました。年少、年中時にも畑の水やりなどをすることで食物に関心が向くのではないかと思います。我が家でもしていますが、食事をつくる過程（料理）で、子どもが少しでも手伝えるようにする事で野菜の好き嫌いが少しずつ減ってくるように思いました。食育指導は、今後とても必要不可欠なものとなると思います。よろしくお願ひします。

☆デザート禁止について私なりに意図を咀嚼し、心がけています。一方で禁止にするより、「たくさん食べたご褒美よ」と言ってきかせ、食事の最後に一粒のいちごを食べる楽しみをお弁当箱に入れてあげたいとも思います。納得できないからと入れ続ける保護者がいらっしやる現状もあり、もう少し保護者と密に話をさせていただく機会をいただければと思います。

☆果物も一つの大切な栄養素ではないでしょうか。常識的な量であれば、お弁当の楽しみとして持たせてやりたいのですが。